友人への打算的な付き合いとネガティブ印象との関連

堀口　夏鈴

（服部　陽介ゼミ）

我々は学校や会社などの社会で生活をしていく際、誰かと関係を構築していく。関係性として、家族関係や友人関係、恋愛関係、上司と部下の関係、先輩と後輩の関係など多岐にわたる。その中でも今回は、友人関係について考えていく。

そもそも、友人関係の友人とは「性愛や肉親愛ではなく親愛の感情と互いの好意によって他者と結合した人」と定義されている（須藤，2008）。さらに、友情について「友情において重要なものは、その対象―友人や恋人―ではなくて愛することそれ自体である」とされている（須藤，2008）。つまり、友人は自身と相手が互いに親しみを感じ合い、恋愛や家族への愛とは違った好意を持つ者どうしを指し、友情は相手を愛すること自体が重要ということだろう。

また友人関係の意味について、水野（2004）は、「自己」と「関係」は不可分に影響しあっているとし、良好な友人関係がアイデンティティ達成を促進する機能を持つとしている。つまり、自分自身を構成することと友人関係は深い結びつきを示しており、良好な友人関係は自己にポジティブな影響があるといえるだろう。しかし、友人関係はどれも自己にとってポジティブな影響がある場合ばかりではない。友人との付き合い方と対人ストレスについて、西村・長野（2009）は、コミュニケーションスキルや社会的スキルの欠如に由来するような劣等感（対人劣等）を、友人と関わっていく中で抱きやすいことや、ありのままの自分を出さない防衛的な姿勢が対人関係におけるストレスを派生させる一要因となっていることを明らかにした。このように、良好な友人関係は自己に良い影響を与える反面、良好でない友人関係は劣等感やストレスの一因になることがあるといえる。

友人との関係を築く動機には、様々なものがあるとされている。岡田（2005）は、友人といることが単に楽しいからという理由で友人との関わりをもっているかもしれないとしている。ただし、周囲から浮いてしまうことへの恐れや孤独感を低減させたいなどの理由から友人関係を形成しようとする場合も考えられるとも述べている。相手と関わりたいからという理由で友人関係を形成・継続していくという一方、他者から見た自分へのネガティブな見方への回避または低減をするためという理由もあるということだろう。これらの動機には個人差があると考えられる。岡田（2005）は、このような個人差を測定するために、友人関係への動機づけ尺度（岡田，2005）を作成した。この尺度は、外的、取り入れ、同一化、内発の４つの因子から構成される。外的因子は、外的な報酬や罰、他者からの働きかけによって行動が開始されるもので、行動の理由が完全に個人の外側にあること、取り入れ因子は、明らかな外的働きかけはないが、他者から統制されている感覚を内面にもっており、不安や義務の感覚から、あるいは自己価値を維持したいために行動すること、同一化因子は、行動がもつ価値を認め、個人的に重要であるからなどの理由で自発的に行動がなされること、内発因子は、興味や楽しさなどのポジティブな感情によって動機づけられ、行動の理由が完全に個人の内側にあることを指す。

このような、友人関係への動機づけの個人差は、他者に抱く印象と関連する可能性がある。特にここでは、相手のネガティブな一面を知った場合の相手への評価と友人関係への動機づけの関係に注目する。Aronson, E., Willerman, B., & Floyd, J.（1966）は、能力の高い人物と能力が平均的な人物が同様の失敗をした際、参加者はそれぞれの人物への評価がどう変化するかを検討した。具体的には、参加者はあるクイズ番組をラジオで視聴し、クイズ番組の回答者であった能力の高い人物と平均的な人物についての評価を求められた。その後、番組内で能力の高い人物と平均的な人物がコーヒー

をこぼすという失敗をした。これに対し、参加者のそれぞれの人物への評価がどう変わったかを分析した。その結果、失敗する前のそれぞれへの評価は変わらなかったのに対し、失敗後は能力の高い人物の方が能力が平均的な人物よりも高い評価がされていることが明らかになった。この結果について、失敗が能力の高い人物への親しみやすさを高め、より人間的であると思わせるからではないかと考えられている。

予測として、打算的な理由で友人関係を形成・継続している人は、相手への評価が通常時よりも下がるのではないか考える。なぜなら、自身にとって損か得かを基準で相手を選んでいる場合、ネガティブな情報が提示されると、その情報に影響を受けやすくなるのではないかと考えたからである。本研究では、この予測を仮説とし、検討する。

本研究では、能力の高い人物をポジティブ、能力が平均的な人物をニュートラルとして、ネガティブな印象が与えられた場合の友人関係への変化を測定する。

予備調査 1

目的

Aronson, E., Willerman, B., & Floyd, J.（1966）の研究では、ポジティブあるいはニュートラルな印象の人物を提示したのちに、その人物のネガティブな側面を示すことで、印象がどのように変化するかを検討している。そこで、予備調査 1 では、ポジティブな印象の人物と、ネガティブな印象の人物に関する記述を作成し、それらの人物の印象の評価に基づいて、本調査で用いる刺激の選定を行う。

方法

参加者

10 代から 40 代の男女計 25 名（男性 11 名、女性 14 名）が調査に参加した。参加者の平均年齢は 22.4 歳（SD = 5.52）であった。

人物に関する記述の作成

まず、ポジティブな印象の人物の作成を行った。作成する上で、ポジティブな文章同士が似た特性を持たないよう注意した。結果、見た目、性格、行動の 3 つの点から文章の作成を行った。見た目では「清潔感のある人物」、性格では「優しい人物」、行動では「仕事ができる人物」を基点とした。質問をする際には、清潔感のある人物から順番に「人物 1」「人物 2」「人物 3」とし、参加者からは清潔感のある人物や優しい人物の記述であることが直接伝わらないようにした。さらに、教示として「ある特徴を持つ人物の印象に関する調査」「以下の特徴を持つ人物について、あなたはどのように思いますか。ご自身の考えに当てはまる選択肢を選んで回答してください。」と記述した。

ポジティブな人物に関する記述の内容として、清潔感のある人物を「髪の毛や顔などの身だしなみが整っていて、部屋も整理整頓されていて綺麗。しかし、それらを他人に強要しない。」とした。また、優しい人物を「体調が悪い時などは連絡をこまめにしてくれたり、電車で席を譲ってくれたりする。人数分の水を持ってきてくれるなどの気遣いもできる。相談事があるときは親身になって話を聞いてくれる。」、仕事ができる人物を「言われた仕事は期限までにこなせる。1 度説明を聞いたらある程度理解して進めることが出来る。分からなければ自分で調べたりして調整して周りにも目をくばることができる。」とした。

次に、ネガティブな印象の人物に関する記述の作成を行った。ポジティブな文章と同様に、ネガティブな文章同士が似た特性を持たないよう注意し作成した。その結果、「家事」「車の運転」「表情」を基点とした。また、家事を「家事が苦手な人物」、車の運転を「車の運転が荒い人物」、表情を「情が読み取りづらい人物」とした。また、ポジティブな印象の人物に関する記述の作成時と同様に、質問をする際、家事が苦手な人物から順番に「人物 4」「人物 5」「人物 6」とし、参加者からは家事が苦手な人物や車の運転が荒い人物の記述であることが直接伝わらないようにした。

ネガティブな人物に関する記述の内容として、家事が苦手な人物を「洗濯や料理、掃除が苦手である。料理をしても片付けができていないなど、完璧にこなすことが苦手である。」、運転が荒い人物を「車を運転する際に、脇見運転が多かったり、歩行者優先を忘れてスルーしたりしてしまうことが

ある。信号を見逃し、急ブレーキになることもある。」、表情が読み取りづらい人物を「会話をする際、感情が読み取りにくく、喜怒哀楽がわかりづらい。何を考えているのかがわからない時が多い。」とした。

質問項目

質問項目として、記述した内容がどの程度鮮明に想像できたか（以下、鮮明度とする）を測る質問を作成した。参加者は、「全く想像できなかった」から「非常に鮮明に想像できた」の４件法での回答を求められた。

また、記述した内容からどの程度ポジティブ（以下、ポジティブ印象とする）、あるいはネガティブ（以下、ネガティブ印象とする）かを測るため、質問を作成した。参加者はこれらの質問に対し、「全くポジティブに感じられなかった」から「非常にポジティブに感じられた」、「全くネガティブに感じられなかった」から「非常にネガティブに感じられた」の４件法での回答を求められた。さらに、友人として、あるいは恋人としての魅力度を測るため、質問項目を作成した（以下、友人としての魅力度を友人魅力、恋人としての魅力度を恋人魅力とする）。参加者は共に、「全く魅力を感じられなかった」から「非常に魅力を感じられた」の４件法での回答を求められた。

各質問項目の内容として、鮮明度を「この人物をどの程度、鮮明に想像できましたか」、ポジティブ印象を「この人物に対して、どの程度、ポジティブな印象を持ちましたか」、ネガティブ印象を「この人物に対して、どの程度、ネガティブな印象を持ちましたか」、友人魅力を「この人物は、友人として、どの程度、魅力的であると思いますか」、恋人魅力を「この人物は、恋人として、どの程度、魅力的であると思いますか」とした。

手続き

調査はGoogle Formsを用いてインターネット上で行った。調査への参加は対面授業内にて呼びかけた。調査の冒頭には調査の目的、手続き、潜在的なリスク・苦痛に関すること、参加による利益、匿名性の確保、参加と中止、調査実施者への問い合わせの計７つの調査概要を記載し、調査の参加に同意する場合には、同意項目にチェックするよう求めた。調査に参加に同意した参加者は、性別、年齢を回答した後、人物の特徴が記された文章を読み、各質問に回答した。

結果

それぞれの人物に関する記述に対し、どの程度の評価をしているのかを調べるために、各質問に対する回答の平均値と標準偏差を算出した。結果を表１に示した。各記述に対するポジティブ印象およびネガティブ印象の得点から、ポジティブな印象の人物に対してはポジティブな評価が、ネガティブな印象の人物に対してはネガティブな評価が、それぞれされていることが示された。すなわち、作成した記述はいずれも適切なものであったといえる。そこで、ネガティブな印象の人物に関する記述のうち、本調査では、最も鮮明に人物についてイメージすることができると考えられる、「家事が苦手な人物」の記述を本調査で用いることとした。

表１　各記述についての評価の平均値と標準偏差

記述	鮮明度	ポジティブ印象	ネガティブ印象	友人魅力	恋人魅力
清潔感のある人物	3.72 (0.46)	3.76 (0.52)	1.2 (0.50)	3.56 (0.65)	3.4 (0.87)
優しい人物	3.52 (0.77)	3.8 (0.50)	1.24 (0.44)	3.88 (0.33)	3.48 (0.77)
仕事ができる人物	3.64 (0.70)	3.68 (0.69)	1.56 (0.77)	3.56 (0.58)	3.48 (0/71)
家事が苦手な人物	3.56 (0.77)	2.32 (0.69)	2.48 (0.92)	2.44 (0.87)	1.96 (0.89)
運転が荒い人物	3.48 (0.87)	1.32 (0.48)	3.64 (0.57)	1.52 (0.77)	1.24 (0.66)
表情が読み取りづらい人物	3.36 (0.81)	1.8 (0.82)	2.88 (1.01)	1.96 (0.93)	1.84 (1.03)

予備調査 2

目的

予備調査 2 では、本調査で用いるニュートラルな印象の人物に関する記述を作成する。ポジティブな印象の人物に関する記述を提示する場合と比較するため、記述内容を可能な限り等しいものに保ちつつ喚起される感情価を変化させることができるよう記述の作成を行った。具体的には、予備調査 1 で作成したポジティブな印象の人物に関する記述のうち、ポジティブな印象の強さに関わる部分のみを修正することで、相対的にニュートラルな印象を喚起することができるよう調整を行った。ここでは、このような調整を行いやすいと考えられた、「仕事ができる人物」に関する記述を用いることとした。

方法

参加者

10 代から 20 代の男女計 33 名（男性 12 名、女性 20 名、その他 1 名）が調査に参加した。参加者の平均年齢は 20.21 歳（$SD = 0.96$）であった。そのうち、ポジティブな印象の人物に回答した人数は男女計 17 名（男性 7 名、女性 9 名、その他 1 名）であった。平均年齢は 20.18 歳（$SD = 9.4$）であった。また、ニュートラルな印象の人物に回答した人数は男女計 16 名（男性 5 名、女性 11 名）であった。平均年齢は 20.25 歳（$SD = 1.00$）であった。

ポジティブな印象の人物に関する記述の作成

予備調査 1 で作成した人物の記述から、「仕事ができる人物」の記述を、ポジティブな印象の人物に関する記述として用いた。今回の調査ではニュートラルな文章を選出することが目的であるため、文章を読んだ際に、よりポジティブに感じられるように文章の調整を行った。教示として、「以下の特徴を持つ人物について、あなたはどのように思いますか。ご自身の考えに当てはまる選択肢を選んで回答してください。」という文章を提示した。

記述の内容は、「言われた仕事は期限の 1 週間前には終わらせる。1 度説明を聞いたら内容をしっかりと理解することができ、もし分からないことがあれば、自分から進んで質問したり、調べたりすることができる。同僚の様子にも常に気をくばり、困っている人がいれば手を差し伸べる。」とした。

ニュートラルな印象の人物に関する記述の作成

ポジティブな印象の人物に関する記述を修正し、よりニュートラルな印象を喚起できるよう調整を行った。記述の内容として、ポジティブな印象の人物の文章をよりニュートラルな文章になるように改変を行った。具体的に、「言われた仕事は期限の 1 週間前には終わらせる。」を「言われた仕事は期限までに終わらせる。」、「1 度説明を聞いたら内容をしっかりと理解することができ、もし分からないことがあれば、自分から進んで質問したり、調べたりすることができる。」を「1 度説明を聞いたら内容をある程度、理解することができ、もし分からないことがあれば、自分から進んで質問したり、調べたりすることもある。」、「同僚の様子にも常に気をくばり、困っている人がいれば手を差し伸べる。」を「同僚の様子に気を配ることができず、困っている人に気づかない時もある。」とした。

質問項目

ポジティブな印象の人物とニュートラルな印象の人物の人物について、予備調査 1 と同様の 5 項目 4 件法の質問を実施した。

手続き

調査はどちらも Google Forms を用いてインターネット上で行った。調査への参加は対面授業内にて呼びかけた。また予備調査 1 と同様に、調査概要を記載し参加の同意を求めた。参加に同意した参加者は、性別、年齢を回答した後、人物の特徴が記された文章を読み、各質問に回答した。

結果

人物に関する記述に対し、どの程度の評価をしているのかを調べるために、各人物に対する回答の平均値と標準偏差を算出した。結果を表 2 に示した。各人物に対するポジティブ印象およびネガティブ印象の得点から、ポジティブな印象の人物

表2　各人物における回答の平均値と標準偏差

人物	鮮明度	ポジティブ印象	ネガティブ印象	友人魅力	恋人魅力
ポジティブな印象の人物	3.41 (0.71)	3.82 (0.53)	1.76 (0.83)	3.53 (0.62)	3.35 (0.79)
ニュートラルな印象の人物	3.44 (0.63)	3.19 (0.91)	1.94 (0.77)	2.94 (0.93)	2.38 (1.09)

に対してはポジティブな評価がされていることが示された。さらに、各条件に対するポジティブ印象およびネガティブ印象の得点から、ポジティブな印象の人物より低い評価がされている。つまり、ニュートラルな印象の人物に対してはニュートラルな評価がされていることが示された。要するに、作成した記述はいずれも適切なものであったといえる。

本調査

方法

参加者

クラウドワークスというクラウドソーシングサービスにモニターとして登録している20代から30代の男女計249名（男性117名、女性131名、その他1名）が調査に参加した。参加者の平均年齢は32.04歳（$SD = 5.13$）であった。そのうち、ポジティブ条件に回答した人数は男女計124名（男性62名、女性62名）であった。平均年齢は31.89歳（$SD = 5.17$）であった。また、ニュートラル条件に回答した人数は男女計125名（男性55名、女性69名、その他1名）であった。平均年齢は32.19歳（$SD = 5.1$）であった。

尺度

友人関係への動機づけ尺度（岡田，2005）を用いた。この尺度は、友人関係への動機づけを測定する尺度であり、外的な報酬や罰、他者からの働きかけによって行動が開始されるもので、行動の理由が完全に個人の外側にあるものを示す「外的」因子（項目例：一緒にいないと、友人が怒るから）、明らかな外的働きかけはないが、他者から統制されている感覚を内面にもっており、不安や義務の感覚から、あるいは自己価値を維持したいために行動する「取り入れ」因子（項目例：友人がいないと、後で困るから）、行動がもつ価値を認め、個人的に重要であるからなどの理由で自発的に行動がなされるものを示す「同一化」因子（項目例：友人と一緒に時間を過ごすのは、重要なことだから）、興味や楽しさなどのポジティブな感情によって動機づけられ、行動の理由が完全に個人の内側にあるものを示す「内発」因子（項目例：友人と話すのは、おもしろいから）の4因子から構成されている。参加者は、1因子につき4項目、全16項目に対し、「あてはまらない」から「あてはまる」の5件法での回答を求められた。これら項目はランダムな順序に並び替えられ、参加者に提示された。参加者は、「あなた自身の考え方について質問します。」「なぜ友人と親しくしたり、一緒に時間を過ごしたりしますか？」という教示を提示されたのち、各項目への回答を求められた。

さらに、記述された人物との友人と関係を継続したいかを調べるために、「関係継続の意思」に関する3項目（「この人とずっと付き合っていきたい」、「この人のことをもっと知りたい」、「この人ともっと親しくなりたい」）（木村・磯・大坊，2012）を用いた。参加者は、それぞれの項目に「まったくそう思わない」から「非常にそう思う」の7件法での回答を求められた。

手続き

調査はGoogle Formsを用いてインターネット上で行った。まず、参加者は調査の冒頭に記載された調査概要を読み、参加の同意を求められた。参加に同意した参加者は、性別、恋人の有無、年齢、クラウドワークスでの名前を回答した後、恋愛に関する尺度、友人関係への動機づけ尺度への回答が求められた。

次に、参加者には人物の特徴が記された文章が提示された。参加者に、人物との場面設定をより鮮明に理解させるために、教示として「あなたと人物Aは出会って2年目です。異性の知人である人物Aとあなたは、1か月に1回程度、会って話をする間柄です。人物Aは、以下のような特徴を持つ人物です。あなたは人物Aについて、どのよ

うに思いますか。ご自身の考えに当てはまる選択肢を選んで回答してください。」と記述した。さらに、続けて、人物Aに関する説明として、ポジティブ条件の参加者には予備調査2で作成されたポジティブな印象の人物に関する記述が、ニュートラル条件の参加者にはニュートラルな印象の人物に関する記述が、それぞれ提示された。その後、参加者は、人物Aに関する質問として、予備調査1、2と同様の質問に加え、「関係継続の意思」に関する3項目と、「この人物と一緒に住みたいと思いますか」、「この人物と、短期的に関わりたいですか」という質問への回答が求められた。これらの質問には、「まったく思わない」から「非常にそう思う」の5件法での回答が求められた。参加者がいずれの条件に割り当てられるかはランダムとした。

質問への回答後、すべての参加者に「先ほど想像してもらった人物Aは、さらに、以下の特徴を持っています。この人物Aについて、あなたはどのように思いますか。ご自身の考えに当てはまる選択肢を選んで回答してください。」という記述を提示し、続けて、予備調査1で作成された、ネガティブな印象の人物に関する記述が提示された。その後、参加者は、先に回答した人物Aに関する質問群と同じ質問群が提示され、それらへの回答が求められた。

なお、本調査では、友人関係に関する質問に加え、恋愛に関する質問も行ったが、本調査の目的とは無関係であるため、分析の対象としなかった。

結果

ポジティブまたはニュートラルな印象の人物への評価から、ネガティブな印象の人物の記述提示後、どのように評価が変化したかを調べるために、変化量を求めた。算出方法として、ポジティブ条件はポジティブな印象の人物の記述を読んだ後の回答から、ネガティブな文章を読んだ後の人物Aに対する回答を引いて算出した。また、ニュートラル条件はニュートラルな印象の人物の記述を読んだ後の回答から、ネガティブな文章を読んだ後の人物Aに対する回答を引いて算出した。人物に関する算出した変化量を、それぞれ、関係継続の意思変化、ポジティブ変化、ネガティブ変化、友人変化とした。分析として、友人関係への動機づけ尺度の4因子と関係継続の意思変化、ポジティブ変化、ネガティブ変化、友人変化について相関分析を行った。

ポジティブ条件の結果

ポジティブ条件の各変化と尺度の相関分析の結果を表3に示す。

外的因子と各変化量の関連について、関係継続の意思変化については、有意な関連が見られなかった（$r(122) = -.115, p = .202$）。ポジティブ変化と外的因子の間には、有意な負の相関が見られた（$r(122) = -.173, p = .055$）。ネガティブ変化は有意な関連が見られなかった（$r(122) = .127, p = .159$）。友人変化は有意な関連が見られなかった（$r(122) = -.141, p = .119$）。

内発因子と各変化量の関連について、関係継続の意思変化は有意な関連が見られなかった（$r(122) = .033, p = .717$）。ポジティブ変化と内発因子の間には、有意な正の相関が見られた（$r(122) = .194, p = .031$）。ネガティブ変化は有意な関連が見られなかった（$r(122) = -.138, p = .126$）。友人変化は有意な関連が見られなかった（$r(122) = .024, p = .791$）。

ニュートラル条件の結果

ニュートラル条件の各変化と尺度の相関分析の結果を表4に示す。

外的因子と各変化量の関連について、関係継続の意思変化は、有意な関連が見られなかった（$r(123) = .023, p = .802$）。ポジティブ変化は有意な関連が見られなかった（$r(123) = -.065, p = .474$）。ネガティブ変化は有意な関連が見られなかった（$r(123) = .118, p = .189$）。友人変化は有意な関連が見られなかった（$r(123) = -.014, p = .876$）。

内発因子と各変化量の関連について、関係継続の意思変化は有意な関連が見られなかった（$r(123) = .119, p = .186$）。ポジティブ変化と内発因子の間には、有意な正の相関が見られた（$r(123) = .173, p = .054$）。ネガティブ変化は有意な関連が見られなかった（$r(123) = -.122, p = .177$）。友人変化は有意な関連が見られなかった（$r(123) = .033\ p = .715$）。

表３　ポジティブ条件の各変化と尺度の相関分析の結果

尺度	関係継続の意思変化	ポジティブ変化	ネガティブ変化	友人変化
外的	-.115	-.173 +	.127	-.141
取り入れ	-.013	-.037	.048	.083
同一化	-.020	.103	-.070	-.044
内発	.033	.194 *	-.138	.024

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表４　ニュートラル条件の各変化と尺度の相関分析の結果

尺度	関係継続の意思変化	ポジティブ変化	ネガティブ変化	友人変化
外的	.023	-.065	.118	-.014
取り入れ	.052	-.016	.001	.092
同一化	-.018	-.086	.021	-.113
内発	.119	.173 *	-.122	.033

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

考　察

本研究では、相手のネガティブな一面を知った場合の相手への評価と友人関係への動機づけの関係に注目し、打算的な理由で友人関係を形成・継続している人は、相手への評価が通常時よりも下がるのではないかという予測を元に、その可能性を検討した。友人関係への動機づけ尺度と関係継続の意思変化、ポジティブ変化、ネガティブ変化、友人変化、恋人変化について相関分析を行った。

分析の結果、内発因子は、ポジティブ条件、ニュートラル条件共にネガティブな印象の人物に関する記述が提示された場合、特にポジティブな評価の変化量が大きいことがわかった。つまり、自分が成長できるから、相手と付き合っていたいからという理由で友人関係を形成・継続している人は、ネガティブな情報に評価が左右されやすく、ポジティブな評価が大きく低下することが示された。

反対に、外的因子に関しては、ポジティブ条件、ニュートラル条件共にネガティブな印象の人物に関する記述が提示された場合、ポジティブな評価の変化量が小さいことがわかった。つまり、打算的な理由で友人関係を形成・継続している人は、ネガティブな情報に評価が左右されにくく、ポジティブな評価があまり低下しないといえるだろう。これは、仮説と異なる結果となった。

仮説と異なる結果になった理由として、打算的な付き合いだからこそ、相手に対し興味の程度が低いのではないかと考える。また、自身に対し利益が出たり得になったりすることを第一目的としている場合、相手のネガティブな部分が利益損失につながらない限り、ネガティブなことに注目されにくいのではないかと考える。故に、相手のネガティブな一面を知った場合でも、ネガティブな情報に左右されにくいのではないだろうか。さらに、自分が成長できるから、相手と付き合っていたいからという理由で友人関係を形成・継続している人がネガティブな情報に評価が左右されやすい理由として、相手への期待値が高くなっている分、ネガティブな情報が提示された際に評価が下

がりやすくなるのではないかと考える。

今後の展望として、今回の調査で記述された人物 A は異性であると示しているが、同性の場合の検証も必要だと考える。同性友人関係と異性友人関係の違いについて本田（2008）は、異性に対してよりも同性の友人の方が、そして友人よりも親友の方が個人の内的適応に与える影響が強いとしている。そのため、異性として記述をするよりも同性として記述をした方が、より強い影響が見られるのではないかと考えられる。さらに、相関分析を行ったところ、統計的に有意ではないと示す結果が多く存在する。これは、データ数が少ないことが関係してくるのではないかと考える。そのため、今後は各条件に対するデータ数を多くする必要があると考えられる。

引用文献

Aronson, E., Willerman, B., & Floyd, J. (1966). The effect of a pratfall on increasing interpersonal attractiveness. *Psychonomic Science, 4,* 227–228.

本田 周二（2008）．同性友人関係と異性友人関係の違い～友人関係機能による検討～　日本パーソナリティ心理学会発表論文集，*17,* 5–12.

木村 昌紀・磯 友輝子・大坊 郁夫（2012）．関係に対する展望が対人コミュニケーションに及ぼす影響―関係継続の予期と関係継続の意思の観点から―　実験社会心理学研究，*51*，69–78.

水野 将樹（2004）．青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか―グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成―　教育心理学研究，*52*，170–185.

西村 麻希・長野 恵子（2009）．現代青年の友人関係と対人ストレスに関する研究　西九州大学健康福祉学部紀要，*39*，65–71.

岡田 涼（2005）．友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討―自己決定理論の枠組みから　パーソナリティ研究，*14*，101–112.

須藤 春佳（2008）．“親友関係”についての一考察―文化・社会・心理学的視点からの検討―　臨床心理学部研究報告，*1*，99–108.